



令和元年度

文化庁「日本遺産」認定！



# 館林市の「里沼」

## SATO-NUMA

里沼(SATO-NUMA) — 「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 —

館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。



### 「実りの沼」～ “<sup>ぼくと</sup>麦都”館林を支えた多々良沼～

- ❖ 多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500年前の開拓者<sup>おおや きゅうはく</sup>大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支える生業の場としての「里沼」へと<sup>ひら</sup>拓かれてきた。
- ❖ 沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が<sup>おこ</sup>興り、“麦都”となった館林では、麦を原料とした<sup>むぎらくがん</sup>麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。
- ❖ 「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、<sup>なます</sup>鯰の天ぷらや<sup>こい</sup>鯉の洗い、<sup>ふな</sup>鮎の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり、もてなしや晴れの日料理として今も暮らしに根付いている。

# 多々良沼周辺の「日本遺産」構成文化財



- ⑨ 上三林のささらは上三林雷神神社の秋祭礼時に奉納されます。
- ⑩ 封内経界図誌・⑪ 沼の漁具と日向舟は館林市立第一資料館(館林市城町 3-1)で展示中。
- ⑫ 川魚料理は市内川魚・うなぎ料理店でお召し上がりください。

<p><b>⑤</b> たたらぬま 多々良沼 未指定(名勝地)</p>	<p>館林市の西北部にある周囲約7kmの沼で、平安時代に行われた<sup>たたら</sup>踏鞴製鉄から名付けられたという。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。この「実りの沼」からとれる<sup>こい</sup>鯉や<sup>ふな</sup>鮒、<sup>なます</sup>鯰や<sup>うなぎ</sup>鰻などは、里人の貴重なたんぱく源となった。</p>
<p><b>⑥</b> たたらいせき 多々良遺跡(カナクソ) 未指定(遺跡) ※野鳥観察棟内に展示あり</p>	<p>多々良沼北岸にある遺跡で製鉄生産址と伝わる。現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製鉄の時に<sup>こうさい</sup>出された<sup>かき</sup>鉾滓を見つけることができる。</p>
<p><b>⑦</b> ないりくこさきゅう 内陸古砂丘 未指定(地質鉱物)</p>	<p>利根川が形成した自然堤防の砂層で、館林市南西部から多々良沼東岸まで続く。砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。</p>
<p><b>⑧</b> おおやきゅうはく 大谷休泊の墓 群馬県史跡(遺跡)</p>	<p>中世の開拓者大谷休泊の墓。戦国時代の館林城主長尾顕長の招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼からの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は大谷休泊の植林事業によるものである。</p>